

音楽家の活躍を支援することで
音楽文化の発展に貢献

新日鉄住金音楽賞



新日鉄住金音楽賞は、1990年に旧新日本製鉄創立20周年と「新日鉄コンサート」放送35周年を記念して設けられた賞で、新日鉄住金が音楽メセナ活動を通じて、日本の音楽文化のより一層の発展と、将来を期待される音楽家のさらなる活躍を支援していく目的で創設したものです。当初の名称は新日鉄音楽賞でしたが、2012年に旧新日本製鉄と旧住友金属工業が合併し新日鉄住金が発足したことにより新日鉄住金音楽賞と改称されました。

同賞には、将来を期待される優れた演奏家に贈られる「フレッシュアーティスト賞」とクラシック音楽を中心に音楽文化の発展に大きな貢献を果たした個人に贈られる「特別賞」があります。諏訪内晶子氏（1990年度、ヴァイオリン）、櫻本大進氏（1997年度、ヴァイオリン）、小菅優氏（2002年度、ピアノ）、下野竜也氏（2006年度、指揮）などフレッシュアーティスト賞を受賞された歴代の方々は今でも国内外で脚光を浴び、大いに活躍されています。2016年度は、フレッシュアーティスト賞に服部百音氏（ヴァイオリン）、特別賞に小栗哲家氏（プロデューサー・舞台監督・技術監督）が輝きました。

同賞を受賞された方々が音楽家として華々しく活躍されていることで、同賞の認知度も高まっています。

新日鉄住金はこれからも同賞を通じて音楽家を支援し、音楽文化の発展に貢献していきます。

新日鉄住金音楽賞(旧・新日鉄音楽賞) 歴代受賞者

- 第1回(1990年度)
フレッシュアーティスト賞／諏訪内 晶子(ヴァイオリン)
特別賞／松本 美和子(ソプラノ)
- 第2回(1991年度)
フレッシュアーティスト賞／長谷川 陽子(チェロ)
特別賞／宮崎 隆男(ステージ・マネージャー)
- 第3回(1992年度)
フレッシュアーティスト賞／服部 譲二(ヴァイオリン)
特別賞／田中 希代子(ピアノ)
- 第4回(1993年度)
フレッシュアーティスト賞／田部 京子(ピアノ)
特別賞／千葉 馨(ホルン)
- 第5回(1994年度)
フレッシュアーティスト賞／本名 徹次(指揮)
特別賞／森島 英子(オペラ・コレペティートル)
- 第6回(1995年度)
フレッシュアーティスト賞／菅 英三子(ソプラノ)
特別賞／三浦 尚之(ミュージック・フロム・ジャパン代表)
- 第7回(1996年度)
フレッシュアーティスト賞／川本 嘉子(ヴィオラ)
特別賞／鶴田 昭弘(ピアノ調律師)
- 第8回(1997年度)
フレッシュアーティスト賞／樫本 大進(ヴァイオリン)
特別賞／小川 昂(音楽史料研究家)
- 第9回(1998年度)
フレッシュアーティスト賞／横山 幸雄(ピアノ)
特別賞／吉井 實行(仙台フィルハーモニー管弦楽団事務局長)
- 第10回(1999年度)
フレッシュアーティスト賞／佐藤 美枝子(ソプラノ)
特別賞／瀧 淳(アート・マネージャー)
- 第11回(2000年度)
フレッシュアーティスト賞／木村 大(ギター)
特別賞／永田 穂(永田音響設計 特別顧問)
- 第12回(2001年度)
フレッシュアーティスト賞／高木 綾子(フルート)
特別賞／伊藤 京子(別府アルゲリッチ音楽祭 総合プロデューサー)
- 第13回(2002年度)
フレッシュアーティスト賞／小菅 優(ピアノ)
特別賞／杉 理一(ニューオペラ・プロダクション代表)
- 第14回(2003年度)
フレッシュアーティスト賞／天羽 明恵(ソプラノ)
特別賞／井阪 紘(音楽プロデューサー)



©Marco Borggreve

小菅 優氏

第13回(2002年度)受賞



©Daisuke Akita

樫本 大進氏

第8回(1997年度)受賞



©吉田民人

諏訪内 晶子氏

第1回(1990年度)受賞

- 第15回(2004年度)
フレッシュアーティスト賞／植村 理葉(ヴァイオリン)
特別賞／栗山 昌良(演出家)
- 第16回(2005年度)
フレッシュアーティスト賞／木下 美穂子(ソプラノ)
特別賞／青木 十良(チェロ)
- 第17回(2006年度)
フレッシュアーティスト賞／下野 竜也(指揮)
特別賞／村上 輝久(ピアノ調律師)
- 第18回(2007年度)
フレッシュアーティスト賞／上原 彩子(ピアノ)
特別賞／木之下 晃(写真家)
- 第19回(2008年度)
フレッシュアーティスト賞／クアルテット・エクセルシオ(弦楽四重奏)
特別賞／金山 茂人(財団法人 東京交響楽団 理事・最高顧問)
- 第20回(2009年度)
フレッシュアーティスト賞／河村 尚子(ピアノ)
特別賞／青木 賢児(財団法人 宮崎県立芸術劇場 理事長)
- 第21回(2010年度)
フレッシュアーティスト賞／長原 幸太
(ヴァイオリン・大阪フィルハーモニー交響楽団首席コンサートマスター)
特別賞／豊田 耕児
(ヴァイオリン・社団法人 才能教育研究会 芸術監督)
- 第22回(2011年度)
フレッシュアーティスト賞／萩原 麻未(ピアノ)
特別賞／室井 摩耶子(ピアノ)
- 第23回(2012年度)
フレッシュアーティスト賞／松田 理奈(ヴァイオリン)
特別賞／栗本 尊子(メゾ・ソプラノ)
- 第24回(2013年度)
フレッシュアーティスト賞／富士 マリ子(ファゴット)
特別賞／岩崎 淑(ピアノ)
- 第25回(2014年度)
フレッシュアーティスト賞／岡本 侑也(チェロ)
特別賞／ひの まどか(音楽作家)
- 第26回(2015年度)
フレッシュアーティスト賞／三浦 友理枝(ピアノ)
特別賞／山田 正幸
(ラ・フォル・ジュルネ 金沢音楽祭事務局チーフ・プロデューサー)
- 第27回(2016年度)
フレッシュアーティスト賞／服部 百音(ヴァイオリン)
特別賞／小栗 哲家(プロデューサー・舞台監督・技術監督)



山田 正幸氏

第26回(2015年度)受賞



ひの まどか氏

第25回(2014年度)受賞



© Naoya Yamaguchi

下野 竜也氏

第17回(2006年度)受賞

フレッシュアーティスト賞／ヴァイオリニスト

服部 百音氏

個性を出すのは
まだ早い。
まずは好きなものに
染まりきりたい



(プロフィール)

服部百音 (はっとり・もね)

1999年東京都出身。曾祖父・服部良一、祖父・服部克久、父・服部隆之はいずれも作曲家という音楽一家に生まれる。ヴァイオリニストだった母の影響で5歳からヴァイオリンをはじめ、8歳からザハール・ブロン氏に師事。2009年、10歳でリビンスキ・ヴィエニャフスキ国際コンクールのジュニア部門で史上最年少第1位。その後も各地の国際コンクールでグランプリを獲得。現在、ヨーロッパや日本で幅広く演奏活動を行っている。2016年にデビューCD『ワックスマン：カルメン・ファンタジー、ショスタコーヴィチ：ヴァイオリン協奏曲第1番』をリリース。



クールシュヴェール国際音楽アカデミー in かさまにて。ザハール・ブロン先生と一緒に (9歳)



2歳のとき、自宅にて母のヴァイオリンで遊ぶ

今までのどの賞よりも重い

——服部さん、小栗さん、このたびは受賞おめでとうございます。
うございます。まず今のお気持ちからお聞かせください。

服部 最初はびっくりして、信じられない気持ちのほうが大きかったです。フレッシュアーティスト賞は、私が尊敬する榎本大進さん(ヴァイオリニスト・第8回受賞)も過去に受賞されていますし、本当に名誉ある賞で、今までいただいたどの賞よりも重く感じています。

小栗 百貨店にいるときに受賞の連絡をいただきました。最初は周りがうるさくてよく電話が聞き取れなくて、賞ならなんでもいただきますと答えたんです(笑)。これまで私がもらったのは小学校の皆勤賞くらい。我々の仕事はまだ世間では認められていな

いと思っていますから、その意味でも、この賞をいただいたことは本当に大きなことだと感じています。

6歳で「協奏曲が弾きたい」

——服部さんとヴァイオリンとの出会いは何歳のときですか。また、著名な音楽一家のお生まれで、音楽は身近にあったと思いますが、どんなお子さんだったのでしょうか。

ヴァイオリンを始めたのは実は5歳で、周りに比べたら遅いほうでした。母はもつと早くやらせたかったみたいですが、結局始めるのが遅くなってしまいました。

6歳くらいのとき、なぜか難しい曲に挑戦してみたくなくて、まだ音階もともに弾けないのにサンス・サーンスのヴァイオリン協奏曲第3番第1楽章を発表会でやりたいと言ったんです。先生からは無

理だからやめなさいと止められたのですが、それでもやると言い張って猛練習をして、やっと弾けるようになったら、今度は急に曲に飽きてしまい、第3楽章が弾きたくなってしまったんですね。さすがに先生も母も堪忍袋の緒が切れて、勝手にしなさいと言われました(笑)。それで1フレーズごと1日100回ずつ毎日練習して、80回目くらいからだんだん弾けるようになっていって、なんとか発表会に間に合わせました。

——音楽への情熱は、やはり小さなころから際立っていますね。

好きな曲ができると、それがずっと頭の中で鳴り響いて、音を出さないと気がすまない子どもでした。ただ、当時はゲーム感覚で早く弾けるようになることが楽しかったんですが、だんだん演奏は内面的

小栗 哲家氏

特別賞／プロデューサー・舞台監督・技術監督

作品の本質にまで
届かなければ、
魅力的な舞台には
ならない



(プロフィール)

小栗 哲家 (おぐり・てつや)

1949年愛知県出身。株式会社アートクリエイション代表。1972年より舞台監督助手として活動を始める。舞台監督としての初仕事は1976年、関西二期会の「アルバート・ヘリング」。その後、ウィーン国立歌劇場、バイエルン国立歌劇場、メトロポリタン歌劇場といった海外有名オペラハウスの引越公演のほか、サイトウ・キネン・フェスティバル松本、ヘネシー・オペラ・シリーズなど国内外のオペラ公演を数多く手がける。劇場建設アドバイザーとしても活躍し、新国立劇場、愛知県芸術文化センターなど多くの劇場の創設に携わっている。



1997年メトロポリタン歌劇場日本公演の『トスカ』終演後、指揮者のジェームズ・レヴァイン、テノールのルチャアーノ・バヴァロッチ、舞台スタッフとの記念写真

1979年ウィーン・フォルクスオーパー日本公演で舞台スタッフと一緒に



な部分が重要で、技術だけではどうにもならないことがわかってきて、今はその難しさを感じています。

—— これまでどういった音楽家に影響を受けたのでしょうか。

作曲家であればチャイコフスキーやショスタコーヴィチといったロシアの音楽が好きです。演奏家は、私も母もロシア出身のオイストラフが大好きで、ヴァイオリニストで聴くなら彼しかないという感じです。

赤ちゃんのころ、私はぜんぜん泣き止まない子だったらしいんですが、いろいろな音楽をかけてみたら、オイストラフが弾くチャイコフスキーのコンチェルトをかけたときだけ泣き止んだと母が言っていました。

8歳から師事しているブロン先生もロシア人で、オイストラフの唯一の後継者だと言われている方で

す。本当に素晴らしい先生で、吸収できるものはほとんど吸収したいと思っています。

音楽経験ゼロから舞台づくりの道へ

—— 新日鉄住金音楽賞は今年27回目を迎えますが、舞台監督の受賞は初めてとなります。小栗さんが舞台のお仕事を始めたきっかけは何だったのでしょうか。

私はもともと音楽なんて一切やっていませんでした。名古屋で学生運動をやっているうちに、やり過ぎたおかげでどこにも就職できなかったんです(笑)。大学時代は大学祭の実行委員長をやっていたので、イベント関連の知り合いがいました。そのなかの一人だった名古屋二期会の事務局長とたまたま街でばったり会って、「今度セビリアの理髪師というオペラをやるから舞台づくりを手伝ってくれないか」と言われました。それが最初、1972年ですね。

もちろんオペラのことなんて何もわかりません。稽古場に着いたらみんなが譜面をめくっているわけですよ。あ、これは違うところに来ちゃったなと(笑)。楽譜は読めませんから、台詞をぜんぶ書き写す。さらに、ここは前奏が3分、ここは間奏が20秒とか、そういう曲の流れも全部書き入れて覚えしました。

その打ち上げの席で今度は東京に来ないかと誘われて、それで東京二期会のオペラに付くことになったんですが、その演目がワーグナーのワルキューレでした。ドイツ語はわからないし、譜面も読めない。仕方ないから小学校の音楽の教科書を買ってきて、四分音符からもう一度勉強し直しました。

—— 長年舞台監督というお仕事をされてきて、その面白さ、または難しさについてどのようにお感じでしょうか。

例えば、緞帳を下ろす指示を出すのは舞台監督の仕事ですが、劇場ごとに下りるスピードが全部違うんです。演奏が終わるタイミングで、そのスピードを計算して指示を出し、劇的に緞帳を下ろせるかどうか。それで拍手の度合いも変わってきます。

また、緞帳が下りたら、最後にカーテンコールをするわけですが、それをどんなふうにするかも舞台監督の裁量です。ミスをした歌手がいて、ブリーイングが出そうだなと思ったら、1人で出さないで3人くらいで出してあげるとか、逆に今日の演技はすごく良かったと感じたら、すぐには舞台に出さないで待たせる。拍手が盛り上がりつつ、観客がどうして出てこないんだろーと思ったときにボンと現れると、ワァッと歓声があがりますよね。そういう計算をすることも仕事のひとつです。

全員に好かれる演奏でなくていい

——服部さんは2009年のリピンスキ・ヴィエニャフスキ国際コンクールで史上最年少1位となり、その後も多くのコンクールで優勝を重ねています。ご自身にとって転機となったコンクールはありますか。

精神的に一番成長できたかなと思えるのが、昨年10月にポーランドで行われたヘンリク・ヴィエニャフスキ国際コンクールです。これはチャイコフスキー国際コンクールと並ぶくらい大きなコンクールで、26歳までの若手演奏家が参加します。私は初めての挑戦で、すごいプレッシャーを感じて、呼吸困難のような状態になってしまいました。

それでもなんとか1次予選は通過したんですが、生まれて初めて2次予選で落ちてしまったんです。演奏としてはベストで、これで落ちたら仕方がないと母とも話していたのですが、やっぱりそのあとは数日考え込んでしまいました。

これまで運良くずっとコンクールで1位をいただ

いてきたので、逆に1位を獲れなかったらと思うとすごく怖くて…コンクールを受ける前が精神的にキツく、もし落ちたらこの世が終わるというくらいに思っていました。でも、だめでも死ぬわけじゃないし、そう思えるようになったら、失敗が怖くなくなりました。以前は10人のお客さんがいたら、その全員に良いと思ってもらえる演奏をしなければいけないと思っている自分がいたのですが、今は誰か1人でも評価してくれればいいと思うし、その意味では良い経験をさせてもらいました。

——小栗さんはこれまで多くのオペラ作品をご覧になつてきたと思いますが、オペラの初心者におすすめの演目はありますか？

私がおすすめしているのはプッチーニの『トスカ』ですね。なぜかといえば、ドラマの展開がものすごく早い。わずか1日の話です。そのスピード感が現代人の感覚に合うんです。また、『トスカ』は1800年代、封建社会のヨーロッパに市民革命が起きる時代の話で、このころの作品は面白いものが多いですね。

ただ、現代物も見えてほしいという気持ちもあります。例えばイギリスの漁村を舞台にしたブリテンの『ピーター・グライムズ』を見てもらうと、プッチーニの時代のオペラとの違いもハッキリわかりますし、1979年にロンドンのコヴェント・ガーデン（ロイヤル・オペラ・ハウス）が来日して『ピーター・グライムズ』を演じたときは、歌が音楽に聴こえない。まるで自然なお芝居を見ているようで、本当に感動しました。

もうひとつ言えば、オペラの良し悪しを決めるのはオーケストラです。オーケストラがだめだと舞台の歌手も輝かないし、どんなにうまい指揮者が棒を振ってもだめですね。作品として成功しない。オペラは総合芸術と言われますが、私は一番大事なのは

オーケストラだと思っています。

——最後になりますが、これからの抱負をお聞かせください。

服部 私が尊敬しているヴァイオリニストのオイストラフや、師事しているブロン先生は、たった1音を出すだけで誰が弾いているかわかるし、人を感動させられます。それは本当にすごいなと思います。ブロン先生が腕のひと振りを出す音は、私が全身を使わないと出せません。私の好きなチャイコフスキーやシヨスタコーヴィチを弾くときは、男性的な骨太の音が欠かせないし、その意味で体力もつけて、いかに効率良く重さを音にのせられるかが自分の課題だと思っています。

小栗 私は今年で舞台監督の現場から離れる予定で、次の世代に託そうと思っています。舞台監督の仕事って、作品の良し悪しがわかってくると、嫌になっちゃうんですよ(笑)。

長野県のサイトウ・キネン・フェスティバル松本の仕事を始めたころ、良いものはこうやってつくり上げていくんだと驚きました。あそこは1カ月間劇場を設置するのですが、オーケストラは2週間かけて練習して、歌い手としっかり合わせて本番を迎える。そうやって時間もお金もかけるから、やはり良いものができます。2、3日練習したくらいでは歌が体に入っていないし、作品の本質にたどり着かないで終わってしまうんです。やっぱり服部さんもおっしゃるように、音楽に心をのせていくことが大切なんです。いま、オペラはあまりお客さんが入りません。これは日本だけに限らず、世界的にも同じ状況です。若いファンを増やしてなんとかオペラを盛り上げていきたいですね。そのために私自身、少しでも力になればと思っています。

(インタビューは2017年3月16日の贈呈式後に行われました)



第27回 新日鉄住金音楽賞

受賞記念コンサート 紀尾井ホールで開催

第27回受賞者であるヴァイオリニストの服部百音氏(フレッシュアーティスト賞)、プロデューサー・舞台監督・技術監督である小栗哲家氏(特別賞)に、3月16日に新日鉄住金本社で行われた贈呈式で進藤孝生社長から記念の盾と賞金をお贈りしました。そして7月18日、紀尾井ホールで受賞記念コンサートが開かれました。



受賞記念トークで、小栗氏はこれまでの経歴を振り返りながら「ものをつくるにはお金と無駄と時間がかかる」「オペラは、最後は音楽で決まる」と、舞台に対する想いや総合芸術といわれるオペラの魅力を音楽とのかかわりを交えて熱く語った



紀尾井ホールは、2016年11月にCDデビュー記念リサイタルを開催したこともあり、服部さんにとって特別な思い出のある場所。ヴァイオリンの名器「ピエトロ・グァルネリ」で奏でる服部さんの真っ直ぐで迫力のある演奏は、会場内を一気に引き込み、観客を大いに魅了した

公演を終えて 新日鉄住金 進藤孝生社長コメント



小栗哲家さんは、舞台監督として、長年にわたって数多くの舞台を幅広く手がけながらも、その一つひとつを職人のように細やかに作り込むなど、芸術を徹底して裏から支えていくさまや、監督としてのご苦勞話に感銘を受けました。同じ年齢、同じくものづくりに徹する者として尊敬の念を抱きました。

服部百音さんは、まだ18歳という若さにもかかわらず、繊細で力強い音色を奏でる確かな技術力に圧倒されました。厳しい訓練を積み重ねてきた服部さんの末頼もしい才能がさらに花開き、今後、国内外で素晴らしい活躍をしていただくことを期待しています。